

最優秀賞

大久保 香弥 (おおくぼ かや) 第六中 2年生

作品名：ゲドと私

図 書：影との戦い ゲド戦記1

「他者を否定することで、自己が成長することはない。他者を認めることが自己の成長につながるのだ。」

この本を読んだ時、そう言われた気がして、ドキリとしました。

「身長が高いから彼女が上手なのは当たり前だ。」バレー部の私は、今までそう思ってアタックが思うように打てない自分に言い訳をしていました。私の部には私よりも背が高く、試合でもたくさん得点を決める子がいます。私は小学三年生からバレーボールをやっていて、彼女は中学生からバレーボールを始めたばかりでした。しかし、彼女の上達は驚くほど早く、長くやっている私をもあっさり抜いてしまいました。「彼女の成長はチームの成長であり、喜ぶべきことだ。」顧問の先生はそうおっしゃっていて、それが正しいことであって、反論してはならないのは分かります。しかし、そう思う一方で彼女の活躍を妬む私がいるのも事実です。試合で彼女ばかりにトスが回って私になかなか来ないことが悔しくてたまりませんでした。が、私はそれに生まれながらの「身長」という理由を付けて、自分の実力からは目をそらしていました。また、チームの勝利が大事だとは分かっているながらも、彼女の失敗をも願っていたところがありました。

そんな時、学校の朝読書で読んでいたこの本に他者を見下し、実力が上である者に対しては自分の未熟さを認めず言い訳を並べるゲドが登場していました。私はそのゲドを最初、「卑怯な奴だ。」と思いました。けれども、それはアタックが上手な彼女に対する私と同じだということに気が付きました。そして、ゲドは影と戦っていくうちに周りに対して謙虚になり自分の未熟さと向き合うようになっていきました。この本を読んで私は、アタックを打つ時以外の彼女にも目を向けるようになりました。そして、彼女が休憩時間にも壁打ちをしていることに私は気が付きました。彼女が色々な場面で自主練習していることも知りました。その時、私は自分と彼女の努力の差を知りました。

自分を格好よく見せたい、人より優れていると思われたい。そんな感情は誰にもあると思います。私もそうでした。しかし、それは他人からの評価を

気にして、自分を大きく見せようとしているだけだったのだと思います。自分の姿を大きく見せようとする、他人を小さく見るのがてっとりばやいのです。人より優位に立とうとし他人を小さく見て見下そうとしていました。それは他者の欠点ばかりを探し自分が上に立とうとするということです。その一方で、自分より実力が上である者に対して、自分の実力の無さを認めたくないばかりに、「才能」という便利な言葉を使って、未熟な自分から目を背けようとしたのです。

周りの人を見下し、自分より優位な人に対して言い訳をつけて自分の実力と向き合おうとしない、そんな私が大きく成長し、他者との交流をはかることができるでしょうか。「自分が大きく成長するためには、自分を大きく見せようとしなくていいことが大切であり、自分に足りないところを認め、謙虚になると他者の存在が大きく見えるようになり、そして他者の良いところが自分の成長のかてとなるのだ。」ということ、この本を読んで考えさせられました。

私はこの本を読んで、自分の実力を認め、謙虚になることで他者の良いところを見つけ、自分自身に取り込もうと思いました。相手を否定するのではなく良いところを認め、取り込めるように努力します。

謙虚になることは他者との交流も深めていきます。傲慢だったゲドにあまり人が集まらなかったのは謙虚さが無かったからだ、私は思います。私自身もなかなかトスを上げてもらえませんでした。相手を見下していたのが伝わっていたのだと思います。しかし、お話しの最後、相手を認め謙虚さを知ったゲドは「大賢人」となり周りの人に愛される存在となりました。私は様々な人と関わり、長所を見つけて認め、自分に取り込んで自分を成長させたいです。だから私には謙虚さが必要です。

他者を否定することはすごく簡単だと思います。逆に認めることはすごく難しいです。だから、私はこれからたびたびこの言葉を思い出したいです。「他者を否定することで、自己が成長することはない。他者を認めることが自己の成長につながるのだ。」